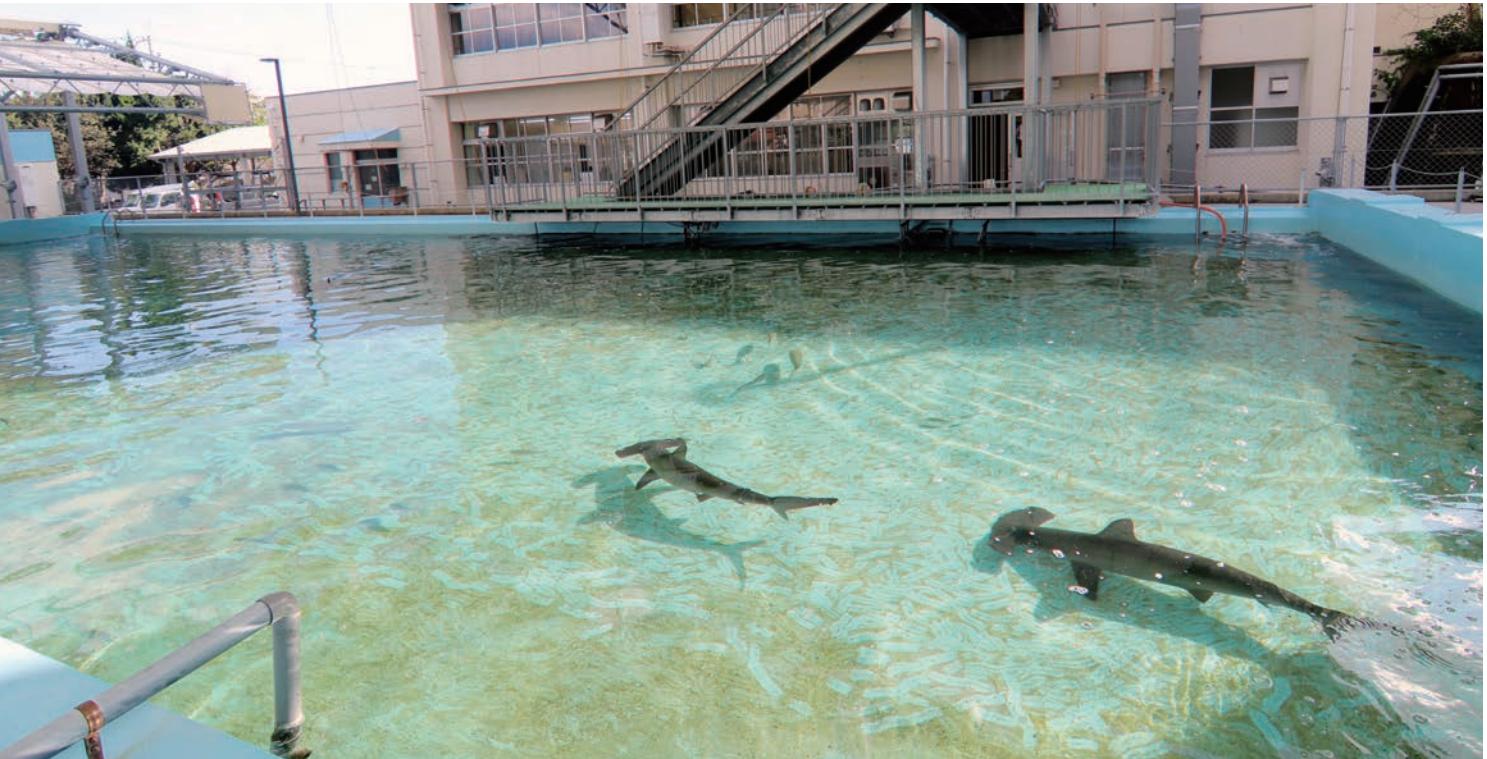


どこか懐かしい小学校跡の水族館 「むろと廃校水族館」



25mプールを活用した水槽には室戸沖で獲れたシモクザメやサバの群れが悠々と泳いでいる

四国南東部、日本八景の室戸岬から北へ約7kmに立つ廃校になった小学校を再活用し、2018年4月に開館した「むろと廃校水族館」。目玉となる魚がいないにも関わらず、1年目は17万人、2年目は14万人もの入館者が訪れたという。わざわざ足を運びたくなる話題のスポットの魅力に迫った。

室戸の廃校を再利用し誕生した注目の水族館

少子化に伴う児童生徒数の減少により、この15年ほどで約7,500校が廃校となり、その施設を再活用する事例が増えている。室戸岬や室戸ジオパークのある自然豊かな高知県室戸市で、2006年に廃校となった旧室戸市立椎名小学校を改修し、2018年4月28日にオープンした「むろと廃校水族館」もその一つ。年間来館者数を4万人と想定していたが、開館からわずか半年ほどで10万人を達成

し、一躍注目を集めた。

「目玉となる生物がないのが、目玉かもしれません」とにこやかに語るのは同水族館館長の若月元樹さん。来客のメインとなる子どもたちが興味を持つ魚は、一人ひとりの感性に合う生物だ。だから必ずしも目玉となるような有名な魚は必要ない。実際に一般的な水族館では脇役であることの多いエイが子どもたちには大人気だという。

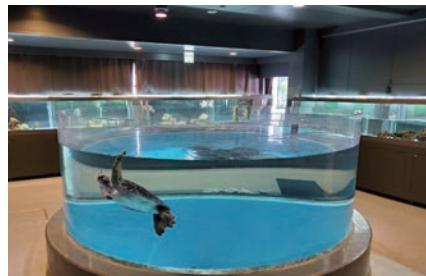
ほかにも、ウミガメをはじめ、約50種1,000以上の魚や生物が展示されているが、すべて地元で獲れたも

のなのだそう。「遠方かつ公共交通も発達していない室戸市まで、わざわざ足を運ぶ来館者が見たいのは、どこの水族館にも展示している魚ではなく、室戸で獲れる魚のはず」との思いからだ。近隣には椎名漁港を筆頭に良質な漁場が多く、地元の漁師の協力を得て、食用にならないなどの理由で出荷しない魚をわけてもらい、冬には冬の魚、夏には夏の魚を展示することで、水槽はヒーター やクーラーを基本的に使わずにコストを削減。来館者にとっても訪れるたびに魚が変わると好評で、リピーターの数も多い。

「むろと廃校水族館」が目指しているのは、百貨店やショッピングセンターのようなすべてが揃う大型施設ではない。必要なものが厳選され、何度も通いたくなるコンビニのよう



むろと廃校水族館外観



室内にある円形水槽では至近距離でウミガメの観察ができる



かつての手洗い場は伊勢海老やヒトデに触れられるタッチプールに変身



教室で開催されるイベントはまるで授業のよう



跳び箱をリメイクした水槽

な水族館なのだという。

誰からも愛される小学校 その魅力を最大限に活かす

「むろと廃校水族館」の魅力は水族館だけにとどまらない。施設名にあえて入れたという「廃校」もこの施設の双肩をなす魅力だ。その最たるものは、25mプールを大胆にもそのまま屋外の大水槽にしてしまったことだろう。全長1.5mほどありそうなシュモクザメがスイスイと心地良さそうに泳ぎ、冬が旬となるサバたちが、青銀に輝く体表をきらめかせながら行き交う。プールは柵やガラスなどで隔てていないため、魚を間近で見られる。この目線は、地元の漁師が海で魚を見る目線と同じだと聞くと、さらに感動が増す。ほかにも、手洗い場を海の生物に触れられるタッチプールにしたり、跳び箱やプロジェクターを水槽にしたりと、学校の建物や備品を絶妙に組み合わせているのもユニーク。一般の水族館では味わえない独特の個性を放っている。

校舎2階の水槽エリアから3階に上がると、懐かしの教室や理科室、図書室などがまるで映画のロケ地のように残されている。大きな定規やそろばんといった教材が置かれ、壁には子どもたちがいかすみで書いたという習字がズラリ。耳を澄ませば、来館者が奏でる木琴や鉄琴の音も響いている。「公立小学校は規格がほぼ同じなので、誰もが懐かしい気分になるようです。記念写真を撮る来

館者も多いですよ」と若月さん。

そんな小学校らしさを求めて訪れる来館者も絶えない。コロナ前は日本文化に興味を持つ外国人客も多かったそう。春前には新1年生になる子どもを連れたファミリー客もよく訪れている。

過疎化が進む室戸市に 再び子どもたちの歓声響く

水族館の運営は、大阪のNPO法人日本ウミガメ協議会が指定管理者として行っている。2003年からウミガメの調査研究のために、室戸市に訪れるようになり、市の廃校の利活用の意見募集を見て、魚を仕入れる漁場が多く、国道が通って観光客が立ち寄りやすいことから、水族館の立ち上げを提案した。後に地元住人と協議・検討を重ね、2016年12月に着工。総工費5億5,000万円の内3億5,000万円は廃校の修繕費で、水族館への改装費としては低価格だった。そこには、小学校らしさをしっかりと残し、身の丈にあった施設にしたいという同協議会の思いが反映された。そんな思いに共感するように、平成生まれの若者が全国からスタッフになりたいと集まった。

開館後も、重複しやすいネットの情報発信はTwitterに一本化し、1日1本の配信のみで返信はしないという省力化の運営に加え、イベントのポスターやチラシも作らず、メディアへ広告やリリースを出さないなど、徹底した効率化によるローコスト運営で黒字に導く。

一方、「楽しい場所へ人は集まる」を信条にスタッフ自ら楽しみながら、水族館や小学校を意識したイベントを次々に開催。お盆にはラジオ体操を行って早朝から営業し、来館者に喜んでもらいながら混雑分散にも成功。ほかにも、25mプールに筏風の設備を期間限定で設けたり、今後、大晦日には流し台で蕎麦を流す流し年越し蕎麦をふるったり、縄跳びで作ったしめ縄を装飾したりするイベントを予定している。

そんな遊び心あふれるアイデアで、四国はもとより関西や中国地方から、ファミリーやカップルなど幅広い観光客を呼び寄せ、地元の観光促進と活性化に貢献。孫連れの地元の年配客も足を運ぶようになり、過疎化の進む室戸市の廃校にできた水族館を中心に、子どもたちの賑やかな声と姿が再び戻ってきている。

取材・写真提供／むろと廃校水族館